婦人と新社會

山田わか主筆

十二月號

大正九年二月二十三日第三種郵便物認可
昭和二年十一月二十三日印刷納本

社會の擁護を要する一夫一婦制

戀愛と道德

結婚する人の心掛けの一つ

良民を苦しめる神樣があるか

―編輯の後―

昭和二年十二月一日發行　第九十三號　毎月一回一日發行

東京　婦人と新社會社發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

社會の擁護を要する一夫一婦制

相互の利益のために、且つ、子供を生み育てるために男女の一生涯の結合を理想としてゐる一夫一婦の制度は久しい間先決問題となつてゐた。そして、一國の人口の大部分は其れを標準とし守つてゐた。

けれども、長い間此の一夫一婦の制度は批評的に研究されなかつた。その必要が感ぜられなかつたのである。そして、そのうちに一夫一婦制は不自然だなどゝ云ふ説が優勢になつて來た。

が、一夫一婦制を嚴守しようとするものも其れに反對しようとするものも實は兩極端である。そして、それは偏見を基礎として感情から論ずるのであるから到底一致點はないし、且つ、その一不致は益々大きくなるばかりである。

人生に最大重要である一夫一婦の結婚制度が何故にさう不安定であるかと云ふと、それは人々の考へが混雜してゐるからである。

第一に問題が斷片的に取扱はれる。全體を總括して其の中に含まれてある原則を發見することの代りに、斷片的の事實を全體として見る癖がある。

第二に多くの論者は家庭の全體の問題は人間問題の第一義的のものだと云ふことを忘れてゐる。

一體、人間は一夫一婦の制度に完全には適してゐないと云ふことも事實である。が、人間は何に對しても完全には適應してゐない。

第一立つて步くのさへ本當は人間の體に適してゐるのではないとさへ云ふ學者がある。なぜなら、人間は一寸體の工合ひが惡くても直ぐ横に寢なければならない。脱腸などは立つて步く結果だとも云はれてゐる。

けれども、常識は立つて步くことになつてゐて、そして、立つて步くことから起る缺陷を何とかして補ふ方法を人は講じてゐる。

それと同じく一夫一婦の制度も改良しなければならない點は澤山ある。と云つて、それがために此の制度が惡いと云ふわけには行かない。

故に、一夫一婦の制度は大いに改良を加へなければならないと同時に社會の擁護を待つ處が甚大である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

戀愛と道德

一　問題解決の鍵を見出そうとする努力は單なる試み

今日の此の複雜な性慾問題を解決する鍵を見出そうとする凡ての努力は、唯、單なる試みであるように考へられます。私共は、今、過渡期に生きてゐます。そして、この性慾問題に關しても、どちらへかの方向を決定しなければならない立場に立たされて居ります

世界は靜止の狀態にあることは出來ません。ウエステルマルクの云ふように、これが正しいと定まつてゐるものは何にもありません。凡ての人が幾分かづゝ付け加へて、そして、調節して行かなければ正しいと云はれるものは出來上がらないのです。

そこで、こゝに一つの信念が起つて來ます。即ち、凡て存在してゐるものは、存在しようとする其れ自身の權利を持つてゐると云ふことです。そして、この原則は社會生活のあらゆる方面の事實にあてはまるように性的の事實にもあてはまります。

或る學者は「人は因習と云ふ全く人爲的な行爲の標準のうちに生きてゐる」と云ひますが、併し、人爲的に勝手に造られた範圍內に生活しなければ社會の外に投げ出されてしまうと云ふ考へ方は本當でないかも知れませんが、とにかく、その因習の中に立てこもると云ふことが人類の最善な發達に有害であると云ふことは事實

です。

ですから、もし、私共が人類の進歩向上をそして幸福の増進を希ふならば、私共はいろ〳〵のことを企てねばなりません。冒險もして見なければならないのです。そして、失敗も亦止むを得ないかも知れません。

二　性慾亂用矯正のための男性の規定は失敗

けれども、これだけのことは確かだと思ひます。

動物の生活に於ける性慾の衝動は本能的です。從つて、その遂行が自然のまゝです。

それに反して、人間のそれには大いに人爲が加はり、誇張があり、そして、過渡的です。人間の想像力が自然の衝動以上に衝動を起さしめ、享樂のために享樂するようになり、亂用を甚しくし、かくして、この性慾なるものが社會的並びに個人的の禍患即ち不幸の根源となつてしまいました。

性慾の亂用がいよ〳〵甚しくなり、男女關係がいよ〳〵亂れ、個々人の不幸の度がます〳〵深くなり、種族に禍ひする處がいよ〳〵顯著になつた時に、この根强い慾望に對する社會的の規定乃至禁制と云ふものが造られました。先づ、女性に對する貞操の要求となつて現れました。

が、文明が進み、想像力が發達すると共に性慾の遂行が自然の狀態を脫して人工的に過渡的になつた男性、物質力をより多く所有してゐる男性が性に關する惡德を矯正するための規定を造ろうとする企ては成功しませんでした。

云ひかへれば、性慾亂用の惡德を矯正するための規定を造ることに於て男性は眞劍味を缺いてゐたのです。

貞操の必要も女子に對してのみ强要して、自己をかへりみない處に大きな不公平がありました。

三　宗教家や道德家の教へも失敗

多くの宗教家や人道主義者や道德家が性慾道德の高い標準を設定しようとして努力しました。けれども、その結果に誇るべきものはありません。

宗教家の獨身生活は斷じて男女關係問題の解決ではないし、又、公然認められた賣笑制度、隱然、又は、公然認められてゐる一夫多妻——卽ち、畜妾の習慣——は文明を誇る今日に於ても依然と行はれて居ります。

種族の壞滅さへもたらしそうになる程、それ程、性慾の亂用が甚しくその惡結果の著しいのを見て、以前の宗教は性慾に關する事柄は口にするさへも惡德であるように教へました。

併しながら、此の問題を取り扱ふために宗教と科學が少しづゝ〳〵接近して來ました。そして、性慾を無視すること、乃至、こう云ふ事實のあることを隱蔽することの得策でない、否、非常に不利益であると云ふ處に今日に於ては人々が氣付いて來ました。なぜなら、性慾があつてこそ種族が保存されるばかりでなく、これが男性には精力と功名心を與へ、女性には優美と魅力を與へると云ふ事實を人は知るようになつたからです。

四　個人的でなく社會の利益を標準に

で、とにかく、性慾に關する事柄は個々人の出來心のようなものによつて決せられる問題で

もなく、法律の命令によつて又は宗教の信仰箇條のようなものによつても決定さるべきものでないと云ふこと、及び、人間の實際の經驗を科學的に解釋した上で決定さるべきものであると云ふことは確かです。

　云ひかへれば、科學的の教への下に、社會の善を標準として一定の標準を設け、國民の凡てを其の標準に從はさしめねばならない。結婚關係に於ける契約の自由は、今日のような狀態の下には必ず放縱に流れざるを得ません。ですから、絕對の自由の代りに社會に有害な結婚は嚴密に取締らなければならないのです。聰明な輿論や道德的の機關を通して、性的に知力的に又道德的に缺陷のある結婚を不可能とすべきです。快樂を目的とする純粹に個人主義的の結婚を排斥するようにならなければならないと思ふのです。

五　祖先崇拜よりも子孫崇拜

　祖先崇拜も惡るくはないが、併し、その代りに子孫崇拜の念を國民が持つようになるならば性慾道德の諸相は大いに改まるであらうように考へられます。つまり、優良な子供を社會に提供することをもつて人が名譽と考へるようにならなければならないのです。

　たとへば、優秀な人物を祖先に持つことを誇るよりも、優秀な子供を社會に提供することが如何に道德的であり、名譽であるかと云ふことを國民が考へるならば性慾道德は大いに向上するであらうと考へられるのです。

六　肉慾に耽らしめないように

舊時代の宗教家や道德家が嫌つてゐたよう

に、性慾並に戀愛の問題を如何に嫌つたからと云つて、併し、これが人類にとつて根本的に重要であると云ふことは否めない事實です。從つて、これ等の問題を無視しようとすることは無駄な骨折りです。

ですから、性慾の問題を口にしたり筆にしたりすることは墮落であるとか、道德的退歩であるとか云ふ風に考へるよりも、人類生存の此の根本事實に對しては深重の研究的態度を取つた方が有益です。

庭の樹木を成長せしむるのに、枝を切つたり添木を結へ付けて、それだけで立派に育つとのみ考へて、樹の根を取りまく土が營養素を送り天然の法則に從つて樹木は大きくなつて行くのだと云ふ道理を知らないのが性慾に對する舊道德家であるようです。

と云つて、唯、單に、舊道德に反對するために此の問題をかつぎ出したり、云ひ直せば、今迄、全く暗黑の中に隱蔽してあつたものを明るみに持ち出すことを面白がつたり、又は、淫蕩的にこれを取扱つたりすることが有害であると云ふことは勿論です。

で、時代の新らしい精神は今云つたような浮薄な放縱を意味するのではなく、同時に、性慾を無視する乃至殺すと云ふ態度でもなく、性の要求を道德化することです。

性慾を道德化すると云ふことは、肉慾に耽らしめない、合理的人物として恥かしくない態度を保たしむることです。つまり、性慾の衝動には一定の制限を加へなければならない。云ひ直せば、社會道德の法則にかなはさしめなければならない。

そこで、人間の生理的及び道德的性質を害すことなくして、如何にして性慾と云ふものを社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

會道德に從はさしむるかゞ、性道德を口にする人々の仕事であると思はれます。

七　社會全體の監督が必要

個々人の性行爲は、個々人の精神生活が彼ひとりの事柄でないと同じ意味で、彼ひとりの事柄でないと云ふことは確かです。そして、昔から性生活に對する社會制裁の必要は既でに感じられ、現に、存在してゐて、それは我々の生活のうちにシツカリと織り込まれてあります。

ジユーイ教授は申ます。『一個人の凡ての行爲は、彼が話す言語と同じく、彼が屬する社會の刻印を持つてゐる。』と。

クーレー教授は申ます。『集合的生活の原則は今も昔も同じことだ。結婚の問題に付ては、即ち、戀愛、求愛、及び、家庭生活と云ふその複雜な關係に於て、今日と同じように昔にも存在してゐた。』と。

ジユーイ教授は又申ます。『ローマンチツク愛は、いろ〳〵の不安や動搖が伴ふにも拘らす、今、存在してゐるように昔も存在してゐた。又、偶像破壞は盛んであるにも拘らず、有識の心のうちには過去の威光が薄いだにも拘らず、且つ又、因習は所謂因習として卑しめられてゐるにも拘らず、實際の事實を觀察すると、社會的の要素が今猶人間生活に於ての決定力である。性行爲に關しても、やはり、社會的の要素が決定力である。』と。

こゝに一つ付け加へて置きたいことは科學的の研究は眞理を求める要求には相違ないですが、と云つて、我々人間生活の全部が、唯、單に、生物學や生理學の知識をもつて滿足して居られないと云ふことです。

多くの他の方面の知識と共に社會的及び倫理

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

的の知識も亦必要です。そして、又、社會的及び倫理的の原則を知ることは此の人生が如何に複雜であるかと云ふことを知ることになり、そして、性生活と云ふような人生の根本問題に觸れたものは、單なる感情によつてのみ、又は、一個人の狹い經驗をもつてのみ、乃至は、生物學的の事實にのみ出立して、解決を試みようとすることの如何に無謀であるかと云ふことが明らかになります。

そこで、今日、先づ、進歩的と考へられ得る處のものは、個人的に考へられたものではなく、むしろ、個人的並びに社會的である人間の性質を最もよく表現し、組織された習慣卽ち集合生活を標準とした原則に從ふことです。

そして、個々人の性行爲に對しては社會全體の監督が必要であると私は考へます。

八　戀愛の自由と貞操とは矛盾しない

眞の戀愛の自由は決して貞操と矛盾するものではありません。法律上の自由は法律を守ることによつて得ることが出來ますし、政治上の自由は野生の自由を捨てることによつて始めて得られるように、眞の戀愛の自由も放縱な戀愛を捨てることによつて得られるのです。ですから、放縱なる戀愛は貞操の敵であると云ふことが出來ます。

眞面目な戀愛は選擇の自由であつて、それは結婚となり、そして、それには責任が伴ひますが、その責任が貞操です。

九　人類の倫理史に現れた理想

總合的に人類の倫理史を見るならば、性的生

活の理想が自ら現れ參ります。そして、その
第一は、男女相互の責任、
第二は、節制、
第三は、威嚴を保つこと、
第四は、人間創造、
第五は、婦人の精神的位置を認めること、
であります。で、第一の男女相互の責任と云ふことは男女平等に貞操を守ることであつて第二の節制は文字が示す通りでして、第三の威嚴を保つことゝ云ふのは女子に於ける美の觀念の尊重、男子に於ける勇氣と云ふようなものです。それから、第四の人間創造と云ふことはこれも文字が示す通り、子供を生み育てより優良な人類を造つて行くと云ふことで、第五の婦人の精神的位置を認めると云ふことは、腕力よりも精神の力の方が強いと云ふことを認めると云ふことです。

十　人間生活の精華、貞操

道德と申ましても、要するに、人の行爲の善惡の標準を云ふのであつて、善とは自他共に利益する行爲であり惡とは自他共に不利益な行爲であるに過ぎません。

そして、貞操が堅固であることは自他の利益であり、貞操がづるいことは自他の不利益でありますから、本當の意味の貞操が人間生活の精華であると云ふことは、古今東西、未來永劫、變ることは無いと私は信じて居ります。

人類生活の根本事實である性慾を高尚に取扱ひ人間生活の精華である貞操を男女が等しく守るようになつて、文明は今日のような物質的な又は男性中心のかたはな文明ではなく萬物の靈長である人間の造つた文明として恥かしくない文明が造り上げられると私は信じます。

結婚する人の心掛けの一つ

結婚は人生の三大出來事の一つと云はれてゐます。そして、結婚の外の二大出來事とは生れると云ふことゝ、死ぬと云ふことです。

それ程、結婚は人生航路の重大なる出來ごとです。のみならず、一個人にとつては、生れることゝ、死ぬことは自分の意志以外の出來ごと、云ひ直せば、自分の意志で生れたり死んだりするのではないに反して、結婚は大部分自分の意志を働かせて起る出來ごとです。

そこで、凡ての人が結婚に對してもつと〱愼重な態度をとらなければならない。もつと〱重要視しなければならないにも拘らず、結婚は今迄あまりに輕視されてゐました。道化の材料に使はれたり、最もつきつめた場合の材料に用ひられたりしてゐました。

結婚が人間の幸福に如何に密接な關係を持つてゐるかと云ふことは、結婚に成功すればこの人生が極樂であり、結婚に失敗すればこの人生が地獄であると云ふ言葉が存在してゐることによつても證明されてゐます。

そこで、劇作家も小說家も、皆、結婚を幸福な結婚と不幸な結婚との二つに分けてゐます。そして、結婚に付て書いてあるものは大抵は文學の部類に屬するものであるように考へられてありますが、併し、結婚は文學の問題と云ふよりはむしろ科學的の問題です。即ち、結婚は生理學、心理學、及び、社會學の見地から取扱はればならぬ問題です。

○

が、今は、さう云ふ詳細な點に觸れてゐる餘地はありません。で、こゝでは、たゞ、獨身生活から結婚生活に入るに付て、しかも、社會人としての心構へに付

て一言云つて置きたいと思ひます。

　現代の所謂目ざめたと稱せられる婦人よりも昔風の婦人におうやうな落着き平和なあたゝか味を見出すことがありますが、それ等の昔風の婦人は現代的婦人の目には奴隸的生活者のように思へても、併し、その實實に於ては、家を、子孫を、國を自己のうちに抱擁し得てゐた立派な社會人であつたかも知れません。從つて、個人としての目ざめはあつても、社會人としての無自覺な現代の婦人よりも幸福の量を多分に持つてゐたのでありませう。

　ですから、人は一個人としての自覺を持つと同時に社會人としての自覺を持たなければならない。云ひかへれば、一個人としての權利を享有すると同時に一社會人としての義務を忘れてはならないのですが、この一個人としてのみ生きてゐた者が、社會人になると云ふ轉期は結婚が最も良き機會だと思ひます。

　具體的に云へば、それまでは全く不規則な放慢な生活をしてゐた男が結婚を機會にひきしまつた生活をするやうになると同じ意味で、それまでは女としての仕事を厭ひ、緊張味を缺いてゐた女の生活を花嫁になるのを轉期とし、一家の主婦として、妻として、將來の母として云ひかへれば社會人となるの心構へが無ければなりません。

○

　女性は――勿論男性もさうですが殊に女性は――經濟上どんなに安定があつても、最高な知識を獲得してゐても、社會上どんなに良い位置にあつても、獨身でゐるうちは何と無しに生活に缺陷を感じてゐるようです。これに反して、既婚婦人のうちには無知無學で、しかも、經濟的に不安な日を送つてゐても、滿腹の滿足を感じてゐるような婦人がある。

　そして、これは、何にが不自由であつても結婚生活を送つてゐることによつて、人生の檜舞臺に載つてゐるような感じであるに反して、獨身婦人はその檜舞臺に載り得ない悲哀を無意識のうちに感じてゐるからだらうと云ふことは曾ても云つて置きました。

○

　私共婦人は古い〳〵昔から生命愛護の精神から一家

庭内の協調者として今日まで働いて來ました。けれども、今後は社會の協調者として働く覺悟を持つ必要があります。

無自覺だと思はれてゐるような婦人でも國家存亡と云ふような危急な場合には日頃生命愛護者であるにも拘らず、隨分、夫や子供を國家に提供して平然としてゐました。だが、こう云ふ犧牲の精神を今後の婦人は平和な時代に於て社會のために働かせなければならない。つまり、自分の家族に對する犧牲的精神の一部を社會と云ふ家族のために貢すのでなければ時代に目ざめた婦人とは云はれません。

ですから、花嫁になる時を、單なる個人から複雜な社會人となる轉期とすることは時代に最もふさはしい心理上の過程です。

人生航路の三大出來事の一つなる結婚にその位ひの重大なる心理的轉期が伴つてこそ、眞に、その言葉に相當する立派な結婚であります。

良民を苦しめる神様があるか

猫の額程の面積ですけれど、その地面を一丈ばかり堀り下げて地下室を造ろうとし、工事なかばに主人は腦溢血を起して倒れたのでした。

すると、近所に何にかの行者が居りまして、「山田のうちでは、鬼門に當る地面を堀つたので地神の怒りに觸れ、主人が恐ろしい病氣にかゝつた」と御苦勞にも近隣の人々を捕へては云ひふらします。

それを聞いた私共の友人は、「人がそんなことを云ふなら、止むを得ないから、お赤飯でもたいてお酒を少し買つて、地の神樣にお詫びをしたらいゝぢやないか」と申ます。

私は大聲あげて笑ひ出しました。そして、「うちで地

面を堀つたゝめに近所の人に迷惑をかけたと云ふなら考へる餘地もあるが、地面を堀つたゝめに怒るなんて、そんなちいつぽけな量見の神様があるとは私は思はない。かりに、もし、さう云ふ神様があるとすれば、私達が地代を拂つてゐる以上此處の地面に對しては私達が主人であるから其の神様に私達は立ち退いて貰ふことを要求しませう。いゝえ、人の家の敷地内に勝手に來て住んでゐながら、その地面をいじつたゝめに立腹してたゝるなんて、さうして良民を苦しめるなんてそんな悪意ある神様ならこちらから立退きを命じます。お詫びなどは決して致しません」と私は威張りました。

私の其の威勢には神様も辟易して怒りをといたのか又は立退かれたのか、何の通知も無いから分りませんが、とにかく、床の上に釘づけのようにされてゐた主人は今では健康な私よりも早く歩けるようになりました。工事もとうに完成したのですが、地の神様は何處へ立ち退かれたのか私は時々その行方を考へます。

編輯の後

主人が病床に臥してから長い間講演に地方へ行くことは一切やめてゐましたが、やうやく離床することが出來、自由がきくようになつた十月末から十一月へかけて私は可なり方々へ出かけました。信州丸子町の教育會を振り出しに德島市德島毎日新聞社主催の講演會、福井市高等女學校主催講演會、千葉縣銚子町の女教員會と云ふように。

こう云ふ風にあちこち歩いて見て最も深く感ずることは、何處へ行つても私共に接近して下さる人々にはそれ〴〵の地方色がもはや無くなつてしまつてゐると云ふことです。容貌と云ひ、服裝と云ひ、言葉づかいと云ひ、大體に於て、東京と同です。が、それは其の筈です。統一された教育を受け、汽車汽船によつて國の中央なる都會との距離が短縮されてしまつてゐるのですから。

で、それ〴〵の地方語を聽いて見たいと思ふなら

ば、自分を取り卷いてゐて下さる方達から及び旅館の人々――旅館の人々は女中までも大抵は東京べんです――から離れて町へ買物に出かけるのが最も便利であるようです。それも老人が店番をしてゐる店へ這入るのが最も有效であるようです。

それにつけても思ひ出さるゝのはメルツの思想史の中の一節です。そして、それは、十九世紀の初頭までの歐洲の文明は英國は英國のを、佛蘭西は佛蘭西のを、獨逸は獨逸のを持つてゐて、それ〴〵の持色はハツキりしてゐたが、併し、交通及び通信が便利になつてからは、即ち、十九世紀の後半に於ては三國平等化の過程が進んで、以前の各國の獨長が擦消され、科學と生活の大問題は今は何處の國でも同じ方法によつて研究され、科學の教授は各國が同一線の上に進められ、思想及び發見は萬國共有の財產となつてゐる、と云ふのです。

ですから、それ〴〵の國の特徵なる思想又は氣分と云ふものには交通及び通信が全然不充分なる邊鄙な場所へ行かなければ接することは出來ないとも云つてゐ

ます。

とは云へ、我が國に於ける統一された教育を充分に受けることが出來ない者從つて或る程度まで高くなつた思想感情の同一線に乘り得ない者が、たとへば、講演會と云ふようなものには全然かゝはり無しに生きてゐる者が我が國にはまだどの位い多數にあるものか、詳細に調べたならば其れは莫大であるように考へられます。

德島停車場で、御目にかゝつたのは始めてゞも本當に御親しい方達にお別れして每日新聞社の坂口女史に送られて小松島に到着し、大阪行きの汽船に私は乘りました、やがて、船が出帆しようとする刹那、突然、棧橋の方に男の怒號女の悲鳴のような聲が致しました。思はず振り返つて見ると、それは、赤い帶をしめた十七八とも見ゆる田舍風の小娘のゑりがみをメリヤスのシヤツにズボン、下駄と云ふいでだちの男がひツつかみ引き倒したのでした。

それは朝の十時です。晩秋だとは云へ、南方の國の日光は麗かで水の上をも陸の上をも暖かそうに押しつ

ゝんでゐて、町は平和そのものゝように穩やかであるのにこれはまア何としたことか？

船員達の話してゐる處を聽けば、この船が出るまぎわになつてから此處へ走せつけて船の中へ飛び込まうとしたのを捕へられたのだそうですが、その娘はどうかして男の手から逃れようとし、むしやぶりついたり、喰ひついたり死力を盡して抵抗します。必死の勢ひにさすがの男もへきゑきして手を離すと石でも砂でも手あたり次第男に投げつけます。又、引き倒されては立ち上がつてむしやぶりつく。三度も四度も其れをくり返へしてゐるうちに、髮は亂れ、帶は解け、着物は砂だんごになつたのですが、それでも決して抵抗の手をやめません。一人の男の手にはどうしてもあまる處からツイには其處へ巡査が來て、可哀想な小娘は二人の大の男にひつかゝへられて其のハトバから姿を消したのですが、その活劇を見て四週間を經た今日其の娘の姿は私の目の前にまだチラツイてゐます。

恐らく此の娘は自分ではさうとハツキリ意識してゐなくても、唯、漠然と地方のねむつたような刺戟なき空氣には耐へられなくなつて都會の空にあこがれ家をぬけ出した處を兄に捕へられたのかも知れません。

無意識のうちに、我が國に於ける思想感情の水準に登りたいと云ふ慾望に心を燃やしての家出では無かつたでせうか？

先づ、さうであらうと定めて、そして、考へて見ると、大盤石のように重い環境の力及び家の事情をも押し退けはね退けて向上の道へ出ようとする若き生命の力も隨分偉大であると云ふことを思はないわけには參りません。

本誌臨時定價表

一冊	金十錢	送料五厘
六冊	前金五十五錢	（送料共）
十二冊	前金壹圓	（送料共）

▲誌代及郵税は前金の事▲御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと▲郵券代用は五厘切手にて一割増▲廣告は御照會次第御相談いたします

昭和二年十一月廿三日印刷納本
昭和二年十二月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉
東京市牛込區山吹町一九八
印刷人　大杉直次郎
東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八番

昭和二年十二月一日發行　昭和二年十一月二十三日印刷納本　大正九年二月二十三日第三種郵便物認可　【定價金十錢】